

田 村 18

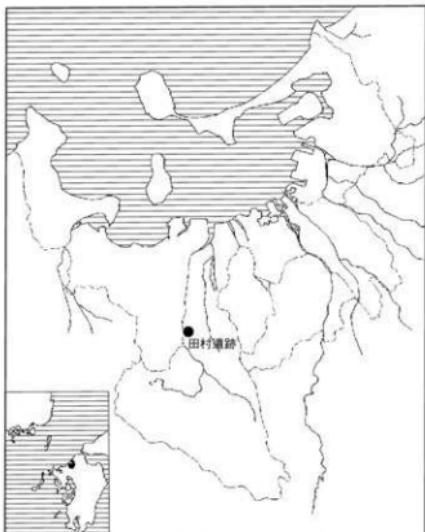
—第26次調査の報告—

2 0 1 1

福岡市教育委員会

田村 18

—第26次調査の報告—



遺跡略号 TMR-26
調査番号 0918

2 0 1 1

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えた福岡市には数多くの文化財が存在しています。それらは本市のみならず国のかけがえのない財産であります、開発によりやむを得ず失われる埋蔵文化財については事前に記録保存調査を行い、後世に伝えるようつとめております。

本書で報告する田村遺跡は、早良平野の中央部、室見川の東岸の沖積平野に展開する遺跡です。古代末から中世では福岡の大規模莊園の一つである野芥莊に関連した可能性の高い重要な遺跡で、さらに古く、縄文時代から古墳時代の重要な遺跡の一つであったことも明らかになっております。

本書で報告する第26次調査地点は調査が比較的少ない田村遺跡の北西部に位置しますが、中世の条里溝や弥生時代の遺構・遺物がみつかり、田村遺跡の具体的な歴史的変遷を明らかにする資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財保護に対する理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料として活用いただけすることを心より願っております。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成23年3月18日

福岡市教育委員会
教育長 山田裕嗣

例　　言

1. 本書は早良区田村1丁目812、811-1敷地内の建設工事に先立って福岡市教育委員会が実施した田村遺跡第26次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査と整理報告は森本幹彦が担当した。遺構の実測と製図は担当者が行った。遺物の実測は担当者のはか、役重みゆきが行い、製図は熊塙御堂和香子が行った。
3. 調査の基準座標は調査区の形態に合わせた任意のものである。この座標により調査区周辺や公共座標の基準点を測量し、道路地図に合成している。本書で用いている方位記号は全て磁北で、真北より $6^{\circ}20'$ 西偏している。
4. 遺構の略号は、溝をSD、土坑をSK、柱穴をSP、その他の落ち込み等をSXとしている。
5. 各調査の出土遺物や実測図、写真などの記録類は平成23年度に福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管する予定であるので、広く活用されたい。

田村遺跡 第26次調査	遺跡調査番号	0918
地　　番　福岡市早良区田村1丁目812・811	遺　　跡　略　号	TMR-26
分布地図番号　92 戸切	調　　査　面　積	310m ²
調　　査　期　間　2009(平成21)年8月3日～8月18日		

本文 目 次

I.はじめに.....	1
II.遺跡の立地と環境.....	1
III.調査の方法と経緯.....	2
IV.調査の概要.....	3
V.遺構.....	5
VI.出土遺物	10
VII.まとめ	12

挿図・写真図版 目 次

Fig.1 田村遺跡周辺の遺跡 (1/25000).....	2
Fig.2 田村遺跡のこれまでの調査 (1/6000)	3
Fig.3 26次調査のグリッド (1/400)	3
Fig.4 26次調査区周辺 (1/400)	4
Fig.5 26次調査区全体図 (1/150)	5
Fig.6 調査区西壁南部土層図 (1/60)	6
Fig.7 SK003、SP004実測図 (1/30)	6
Fig.8 表土、SD001、SX002出土土器 (1/3)	7
Fig.9 SK003、SX005出土土器 (1/3)	8
Fig.10 II・III区砂層出土土器 (1/3)	9
Fig.11 III区砂層出土土器 (1/3).....	10
Fig.12 IV区砂層出土土器 (1/3).....	11
Fig.13 田村遺跡北西部の条里溝 (1/3000)	12
PL.1 田村遺跡周辺航空写真 (昭和23年)	13
PL.2 (1)調査前の状況 (2)調査区全景	14
PL.3 調査区西壁土層(1)~(3)	15
PL.4 (1)調査区中央遺構配置 (2)SD001	16
PL.5 (1)SX002 (2)SK003土層 (3)SK003とSP004	17
PL.6 (1)7次調査区との位置関係 (2)砂層の掘削状況	18

I. はじめに

(1) 調査に至る経緯

2009(平成21)年4月23日付けで株式会社西日本測量設計より福岡市教育委員会宛に、早良区田村1丁目811番4号、812番2号（敷地面積2158.67m²）における老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財の有無について照会がなされた。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である田村遺跡内であり、2009年5月12日に埋蔵文化財第1課事前審査係で確認調査を実施したところ遺構・遺物の存在が確認された。この成果をもとに協議を行った結果、建設工事にあたって地盤改良杭の打設等の必要があり、遺構の破壊を回避できないことから、記録保存のための発掘調査を実施することになった。確認調査の成果から、建設工事により埋蔵文化財が影響を受けると判断される、申請地北部の315m²を調査対象とした。調査・整理費用の一部には国庫補助が適用された。2009年7月末に業者による表土の重機掘削が行われた後、同年の8月3日から8月19日まで発掘調査を実施した。整理作業は平成22年度に行った。

(2) 調査組織

調査委託 中野健

調査主体 福岡市教育委員会

埋蔵文化財第2課	課長	田中壽夫
	調査第1係長	杉山富雄（調査時）
	調査第2係長	菅波正人

庶務担当 埋蔵文化財第1課 管理係 古賀とも子
(旧・文化財管理課管理係)

事前審査 埋蔵文化財第1課 事前審査係長 宮井善朗
事前審査係 木下博文

調査担当 埋蔵文化財第2課 調査第2係 森本幹彦

II. 遺跡の立地と環境

田村遺跡は早良平野中央部の沖積微高地上に立地する（Fig.1・2）。遺跡の範囲は東西700m、南北800mを測り、標高は13～17m前後である。周辺は整然とした条里地割が良好に遺存する地域として有名で、現在の土地境や道路、水路等もこの方向に沿っている箇所が多い。福岡の大莊園の一つである、野芥荘とその経営に関わった集落である可能性の高いことが、これまでの調査成果によって明らかになってきた。

これまで、26次の調査が行われているが、21次までの調査成果は田村15（福岡市1031集）などで簡潔にまとめられている。これまでの調査は遺跡の中央から南東部の箇所が多く、遺跡の中心も4次から5次調査地点の付近である。遺跡は縄文時代から江戸時代までの複合遺跡であるが、中でも目立つ時期が縄文時代後期～晩期、弥生時代前期～中期、平安時代～中世（11世紀～14世紀）である。

26次調査地点は田村遺跡の北西部に位置する。東隣が7次調査地点であるが（Fig.4）、田村遺跡の中では調査の少ない地点であり、それらの調査成果も遺跡の縁辺的な様相を示している。7次調査では12世紀後半～13世紀前半の水路とみられる南北方向の条里溝がみかれているが、26次調査区でみつけられた東西方向の溝はその分水路である可能性が高い。より古い時期では、7次調査区で古墳時代中期前半の竪穴建物や土器棺が、26次調査区では弥生時代終末期の土坑や、当該期と弥生時代中期中葉

から後期前半の遺物包含層がみつかっている。当該期の集落が周辺に展開することを予測させるが、これらは、田村遺跡の中央～南東部でみつかっている弥生時代から古墳時代の集落とは、消長など、様相をやや異にしている。



1.田村遺跡 2.平田遺跡 3.田隈遺跡 4.次郎九遺跡 5.次郎丸高石遺跡
6.免遺跡 7.野芥大蔵遺跡 8.野芥遺跡 9.筒道遺跡 10.重留遺跡

Fig.1 田村遺跡周辺の遺跡 (1/25000)

III. 調査の方法と経緯

調査区の層序 (Fig.6) は近現代の水田耕作土とみられる表土 (1～4層) の下に厚い灰褐色砂層 (5層) があり、その下層が地山の砂礫層 (6層) である。試掘では東西方向の溝 (SD001) と弥生土器を検出しているが遺構面は6層ということであり、業者が発掘調査に先行して行った鋤取りも5層の途中まで及んでいた。調査担当者もその意識で、5層を重機で掘削していたが、途中でSD001の遺構掘削面が5層上面であることに気付き、重機掘削を途中で停止したが、調査区西部を中心として遺構面を大幅に削平してしまった。鋤取り後の面を十分に精査していれば防ぐことのできた過ちであった。

調査のグリッドは調査区の形状に合わせた任意のもので、Fig.3の通りである。このグリッドにより周辺の土地境や道路、約1Km離れた3級基準点2点を測量し、Fig.4のように座標（世界測地系）を求めた。

調査は表土剥ぎ後の面で遺構を検出した。その記録作業の後、弥生土器の遺物包含層である5層について、グリッド掘りを行った。

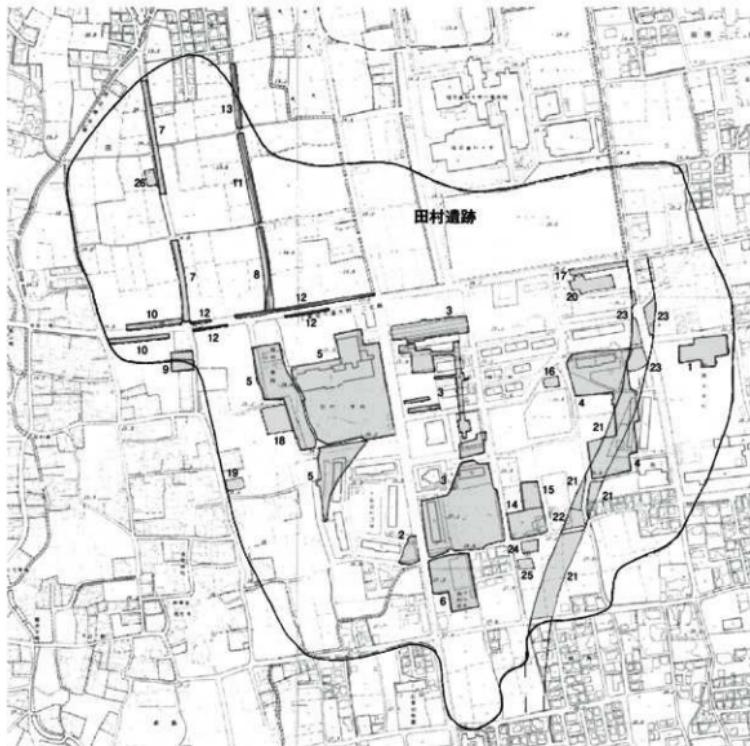


Fig.2 田村遺跡のこれまでの調査 (1/6000)

IV. 調査の概要

検出した遺構は中世の溝1条と弥生時代終末期の土坑1基等である。SX002、SX005は自然の落ち込みであろう。上記のような不手際のため、遺構面が5層下部～6層上面となったが、元々、遺構密度の薄い地点であり、本来の遺構数と大きな開きはなかろう。5層の砂層は弥生土器（中期中葉～後期前半と終末期）の包含層であるが、5・6層の境界付近を中心とした出土である。5層は調査区の北西部が標高13.6mと高く、厚み（約50cm）があるが、南部は標高13m未満で、南東部へは5層が及んでいない。弥生土器の出土量もこれにおおむね対応しており、当地点の北西に微高地と弥生時代集落の本体が存在するとみられる。このような傾向から5層の掘削範囲はFig 3の通りである。

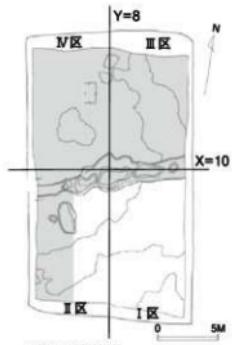


Fig.3
26次調査のグリッド (1/400)

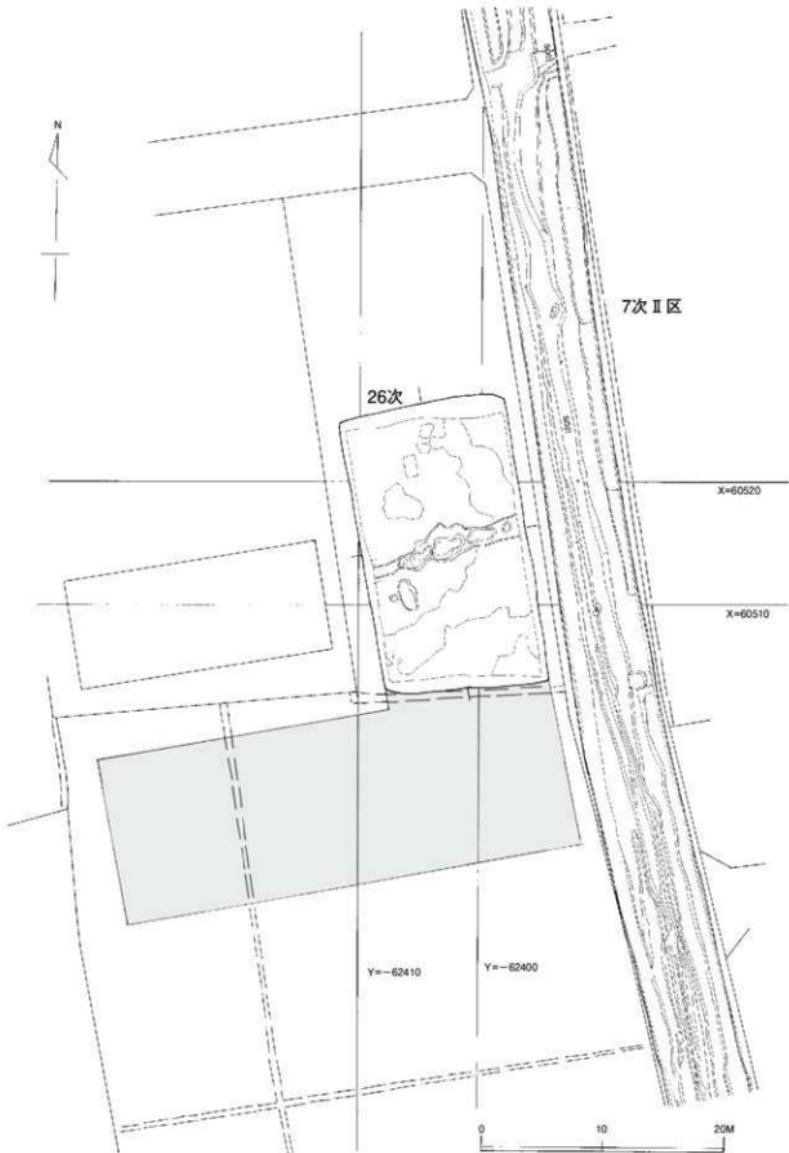


Fig.4 26次調査区周辺 (1/400)

V. 遺構

(1) SD001 (Fig.5・6)

検出面から深さ10~30cm前後の溝で、東西方向に長さ12m以上検出した。壁面の土層断面から、本来は幅1.7~1.8m、深さ0.6m前後の箱掘りである。周辺の地割に対して約10°偏る。底面の標高は西が12.7m、東が13m前後である。下層の18・21層の黒灰色細砂層は流水による堆積であり、東から取水する水路とみられる。

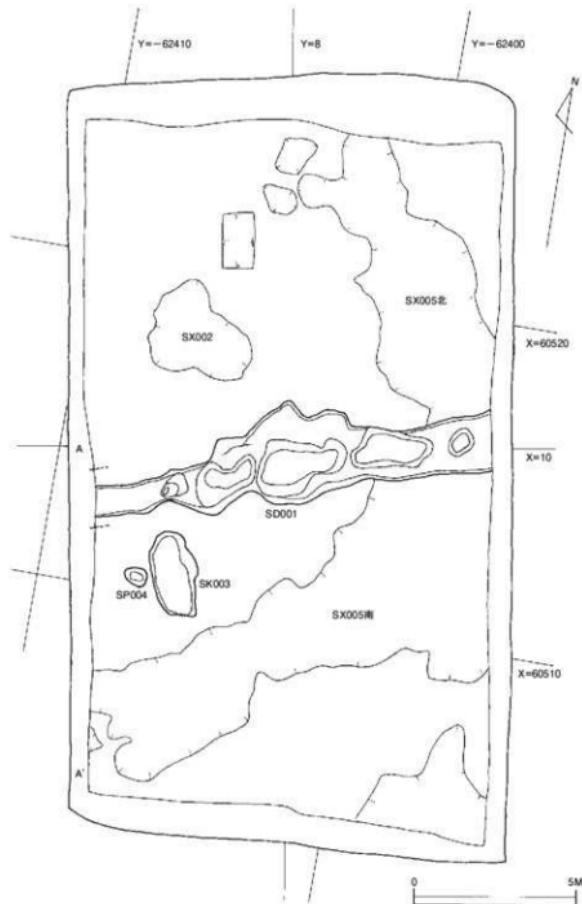


Fig.5 26次調査区全体図(1/150)

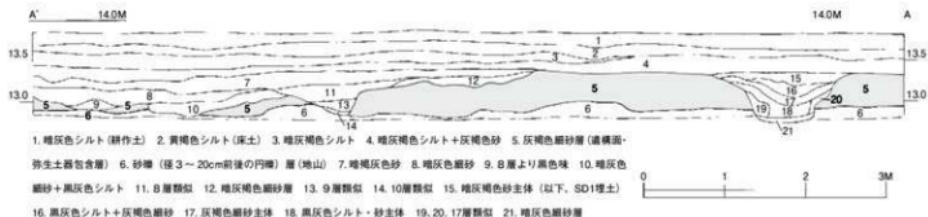


Fig.6 調査区西壁南部土層図(1/60)

出土遺物は弥生土器が主体であるが、弥生時代の包含層である5層を掘り込んだ遺構であり、土器の遺存率も良くないため、その多くは混入品と見たほうが良いだろう。後述のように周辺で検出された中世の条里溝との関係で理解すべきと考えられる。

(2) SK003、SP004 (Fig.7)

SK003は長さ2.6m、幅1.2m前後、深さ0.14~0.24mの土坑である。覆土は黒灰色シルト・砂に灰色砂が混じる。遺構の南部より弥生時代終末期の壺(16)が口縁・底部を欠くが直立に近い状態で出土している。遺構形状等から土壙墓等の埋葬施設である可能性も考えておきたい。西に隣接するSP004は0.6×0.7m、深さ0.18mのピットで覆土はSK003と類似している。

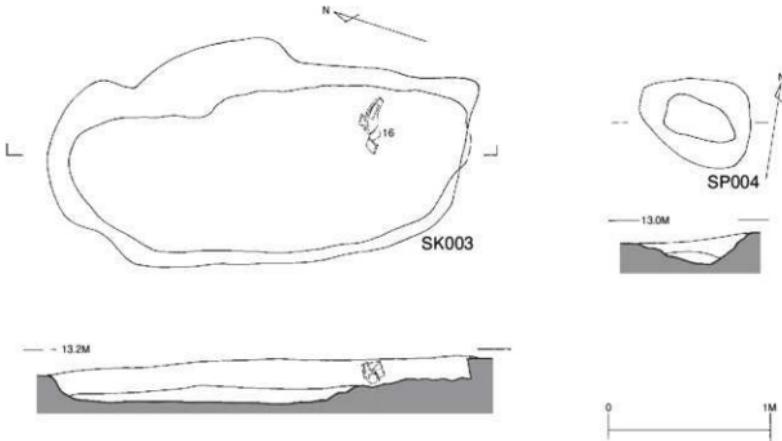
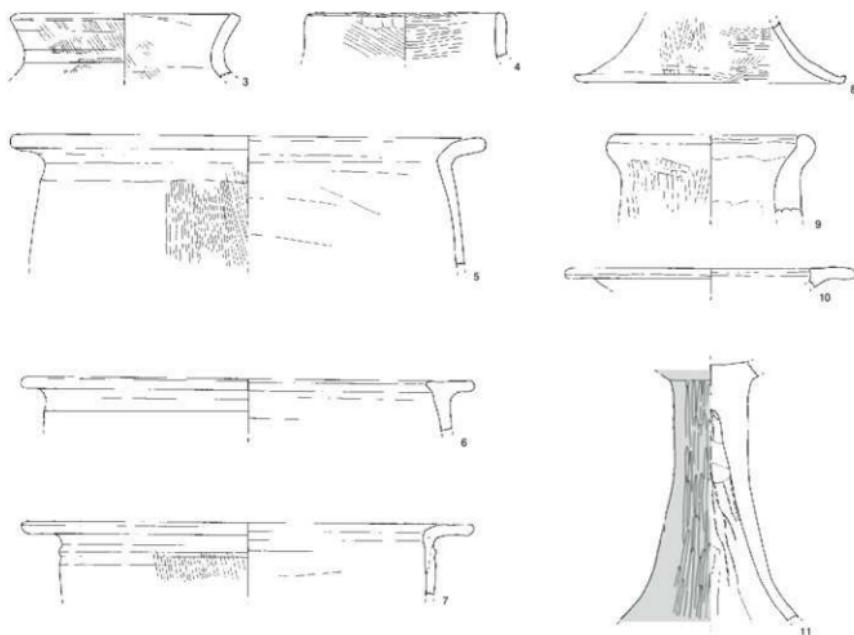


Fig.7 SK003、SP004実測図(1/30)



表土层



SD001



SX002

Fig.8 表土、SD001、SX002出土土器(1/3)

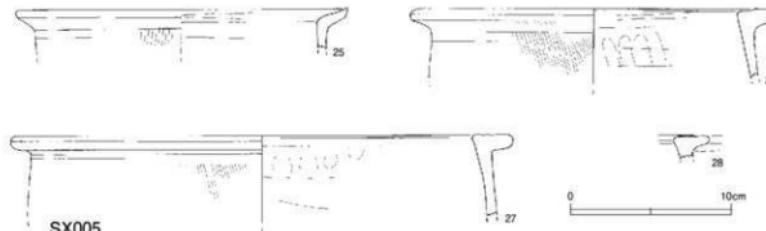
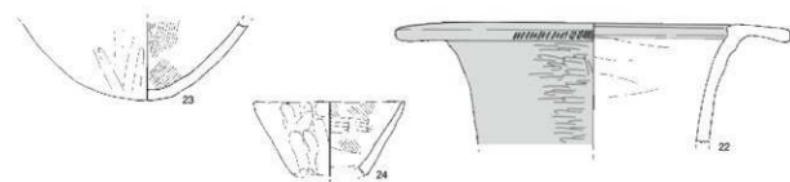
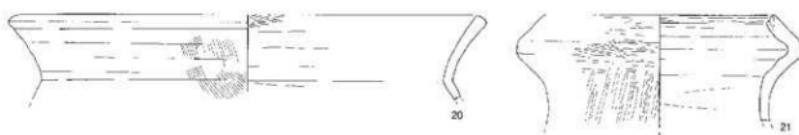
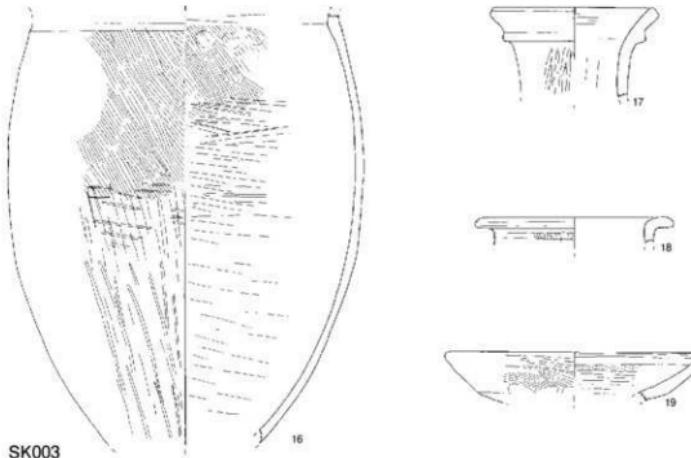


Fig.9 SK003、SX005出土土器(1/3)

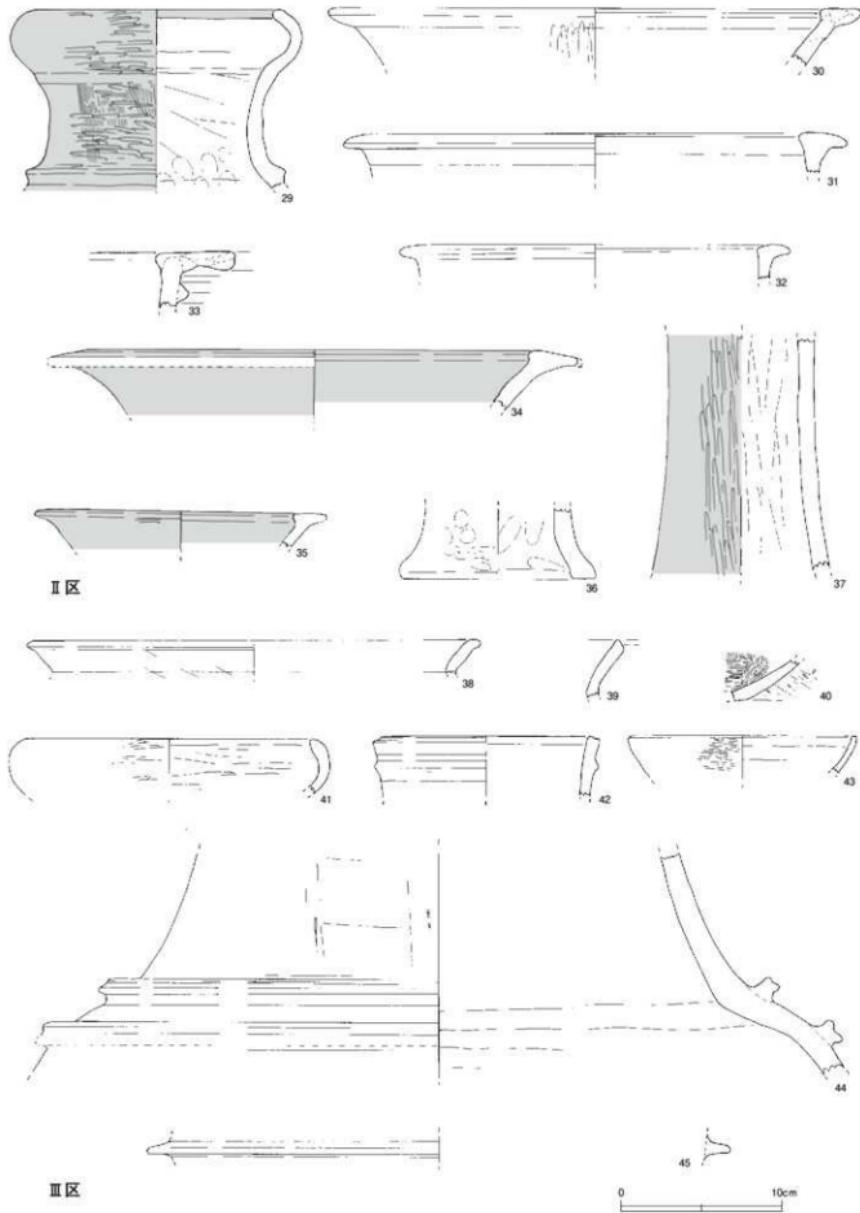


Fig.10 II・III区砂層出土土器(1/3)

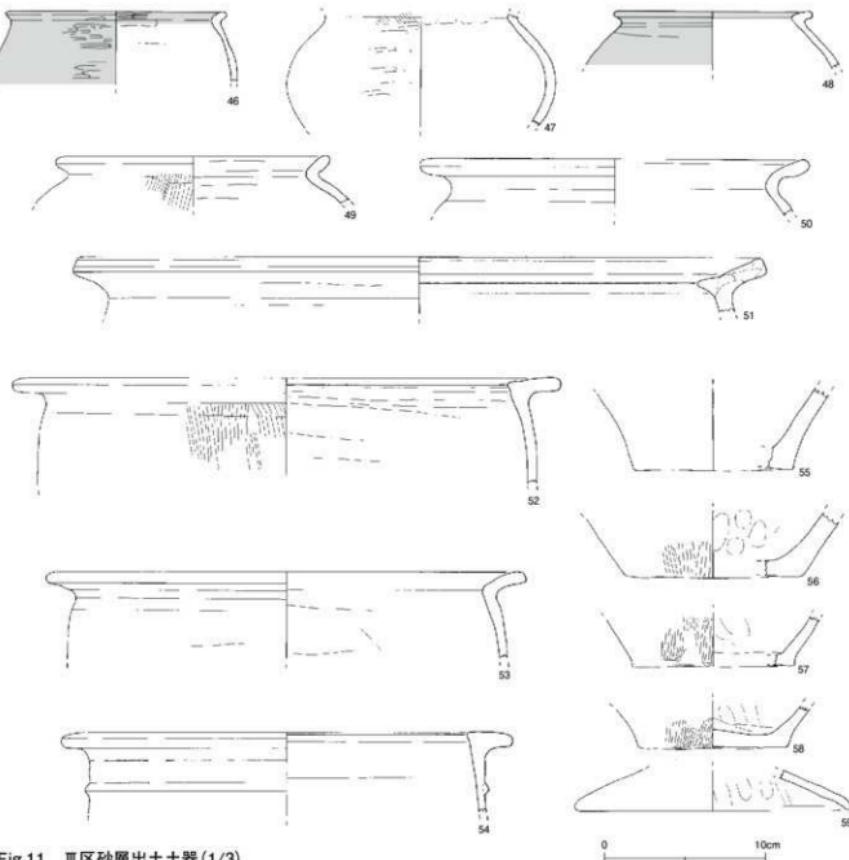


Fig.11 III区砂層出土土器(1/3)

VI. 出土遺物

図化遺物75点のうち、73点が弥生土器である。それ以外の時期の土器は1の黒色土器B類椀と2の土師器鉢である。いずれも表土層からの出土で、前者は中世前半、後者は古墳時代後半期のものと考えられる。前述のようにSD001の弥生土器は混入遺物であり、1の黒色土器が遭構の時期に近いとみられる。

出土遺物の大半を占める弥生土器は中期中葉（須玖I式）～後期前半と終末期のものである。実測図は出土場所・層位別に示したが、確実に遭構に伴いそうなものは、前述したSK003出土の終末期の壺胴部（16）のみであり、多くは5層の灰色砂層の包含遺物とみられる。灰色砂層等から出土した弥生土器は中期後半から後期前半が多いが、須玖I式（6・18・25・26・27・28・30・31・32・35・54・62・

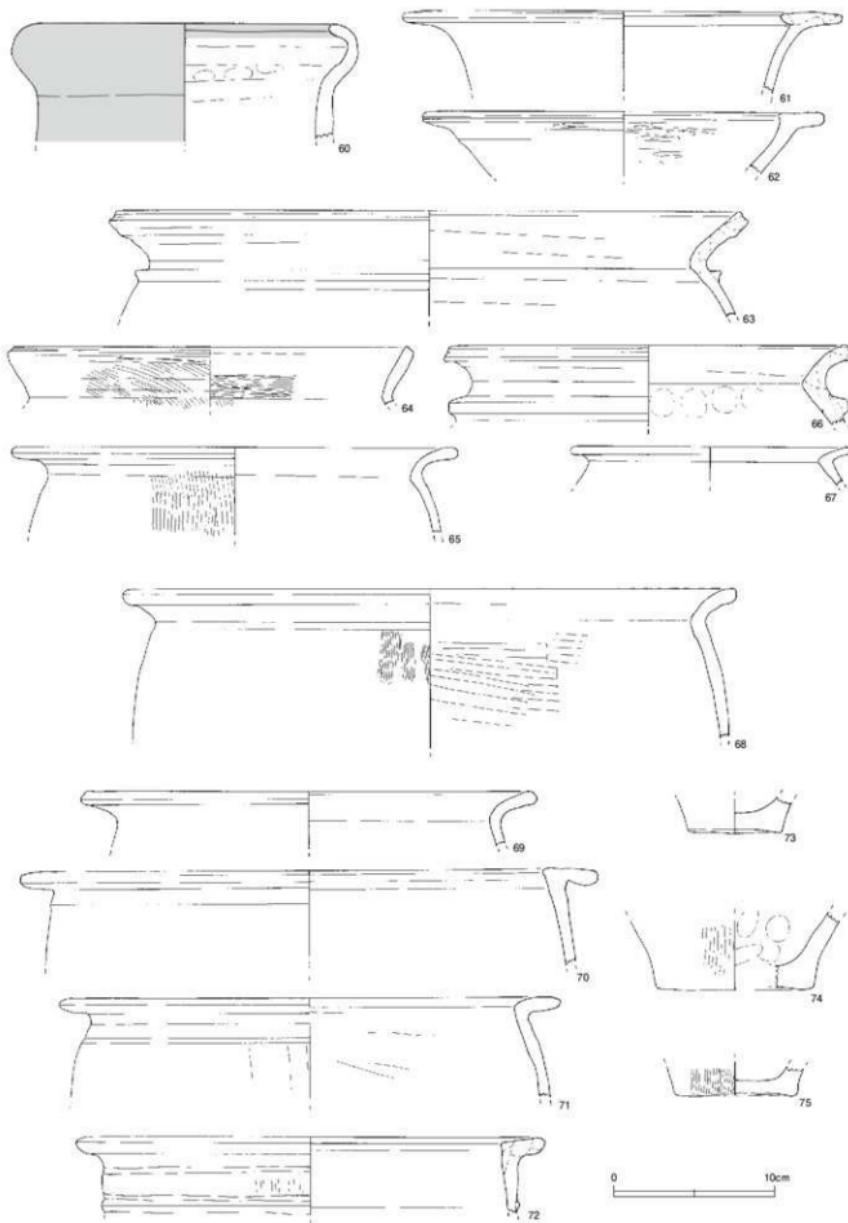


Fig.12 IV区砂層出土土器 (1/3)

70・71・72)と終末期(3・4・12・13・19・20・23・24・39・40・63・64)土器を定量含み、6層(地山砂礫層)上面付近から出土した土器の中にも数は少ないが、終末期のものが含まれている(63ほか)。

特異な土器としては、中期後半前後の東北九州系直口壺(17・42)や甕棺KIII b式(33)などがある。また、中期の屈折口縁の1種で、口縁部が内湾気味で頭部内面の稜線が突出気味の甕が糸島地域で類例が近年増加しているが、25や51はそれに近いタイプの甕であろう。前者はより古い型式で、須玖I式期と考えられる。

土器以外では石器が少数出土している。主としてIV区の5層から黒曜石石器が5点26.4g出土している。弥生時代の不整形剥片石器3点と石核2点とみられる。

VII. まとめ

Fig.13は田村IX(福岡市第384集)で榎本義嗣氏が作成した図を元に、近年の調査区や溝を加えて作成したものである。中世の条里溝は南北方向の主水路と、そこから分岐する東西方向の分水路で構成されるが、主水路が1町単位を基本としているのに対して、分水路は半町単位ないしはそれ未満の位置にも設けられている。26次SD001は7次SD01から西に派生する分水路とみられるが、その北と南では東へ派生する分水路の存在が明らかになっている。前者とは36m、後者とは72mの間隔があるが、1/3町単位で設けられていると理解することができる。これらの条里溝は主水路の出土遺物から12世紀前半に開削され、その後半以降に埋没するものとみられている。26次調査の黒色土器B類は溝に伴うものではないが、その時期を示唆する遺物と考えられよう。

また、26次調査地点では弥生土器のまとまった出土があり、調査地点の北西に弥生時代の集落が立地する微高地が存在することを予測させる。田村遺跡の北西部では、弥生時代の遺構・遺物がほとんどみつかっていなかったので、近くに集落の存在を予測させる今回の調査成果は決して小さなものではない。時期は弥生時代中期中葉から後期前半と終末期である。田村遺跡における前者の時期は、2次調査の井堰を伴う河川や17、20、21次調査の溝等が知られ、後者に近い時期では、2次調査の古墳時代初頭の土器棺、3次調査の井堰を伴う河川などの調査成果が明らかになっているが、当該期の集落はあまり明確ではない。弥生時代の竪穴建物等の集落関連遺構は17、20次調査でみつかっているが、中期前半を中心とするものであり、田村遺跡における当該期の弥生時代集落の解明は今後の調査に待つところが大きい。

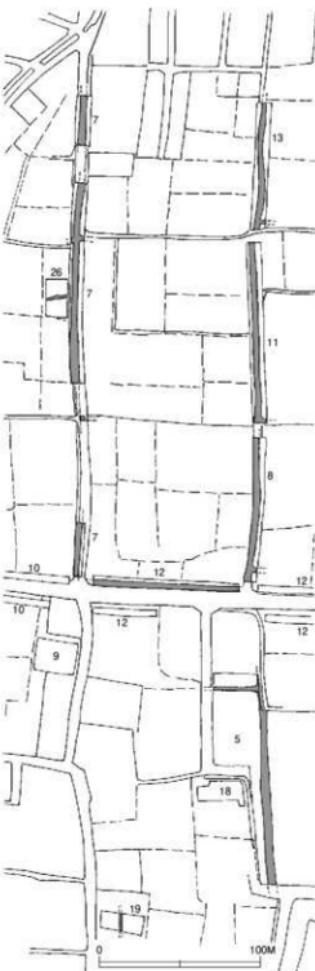


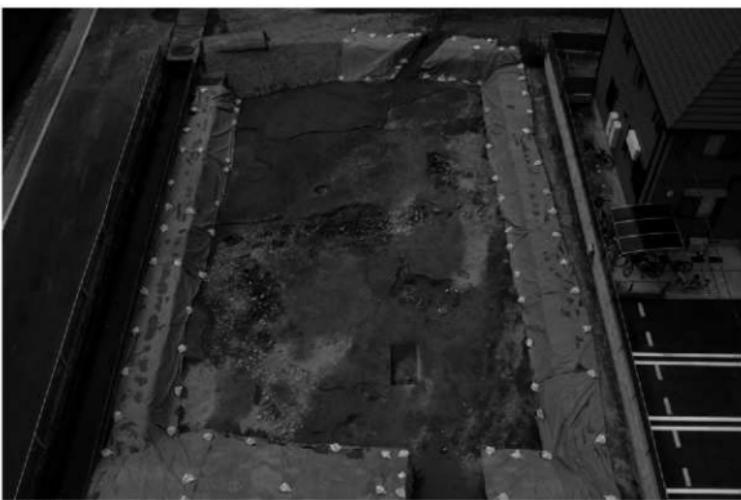
Fig.13 田村遺跡北西部の条里溝(1/3000)



田村遺跡周辺航空写真（昭和23年米軍撮影）



(1) 調査前の状況（鋤取り後、北から）



(2) 調査区全景（北から俯瞰）



(1) 調査区西壁土層 (SD001 の北、東から)

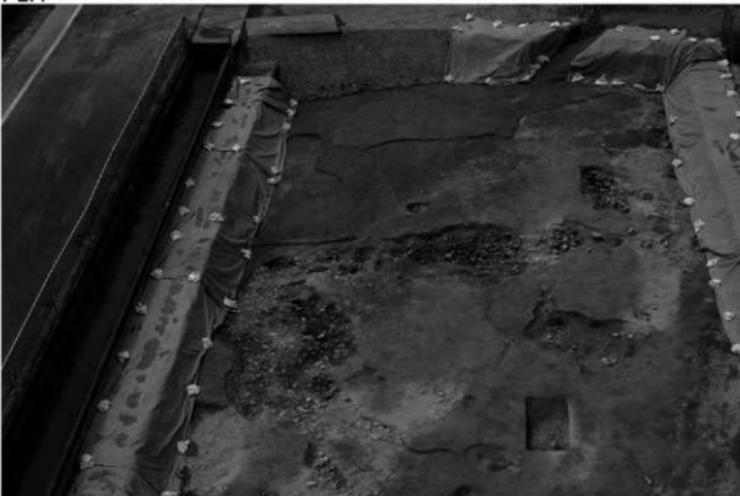


(2) 調査区西壁土層 (SD001 周辺、東から)

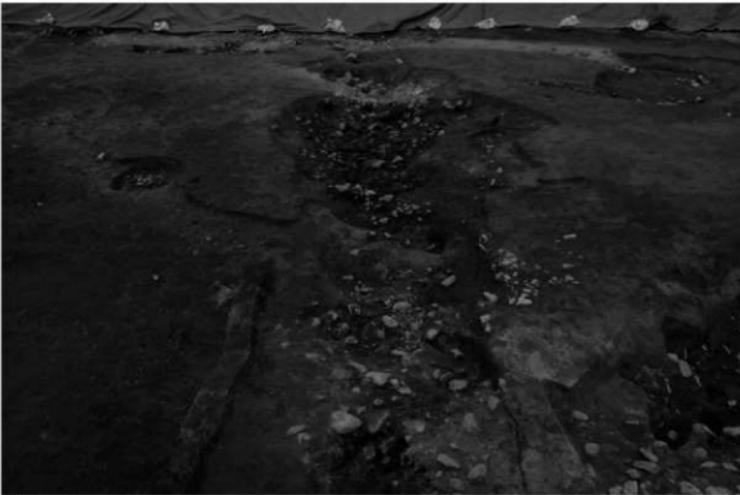


(3) 調査区西壁土層 (SD001 の南、東から)

PL.4



(1) 調査区中央遺構配置（北から）



(2) SD001（東から）



(1) SX002 (北西から)



(2) SK003土層(西から)



(3) SK003とSP004(西から)

PL.6



(1) 7次調査区(隣接する道路の調査)との位置関係(北から)



(2) 砂層(弥生時代遺物包含層)の掘削状況(北東から)

報 告 書 抄 錄

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1119集

田村 18

- 第26次調査の報告 -

2011年（平成23年）3月18日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1・8-1

印 刷 株式会社親和プロセス
福岡市南区塩原1・4-4